

この文書において、前号にもみられたが、「御神楽歌」が「御楽歌」と記されている。これはおそらく誤記であろう。次のお話にも、それが見受けられる。少し注意しておきたい。

御楽歌二付テ話

我国ニ置テ、唱歌ノ始メハ皇祖天照大神様が天ノ岩戸ニ御ハイリニナツタ時ニ、天ノ宇受売命ガ一二三四ノ歌ヲウタイタマイシ事デ、在ト古語拾遺ニ出テアル。尤モ諾冉二神、天ノ御柱ヲメグリ玉ヒシ時ニ、伊弉諾命ノ阿那ニ迹夜志ノ御歌ハ古イテ在ガ、唱歌とシテワ、在ガ唱は一唱三嘆と申テ、歌ヲ発スル声ヲ云ウノデ在テ、唯歌ト云ト、唄ハナイ歌ノ意味ヲモ含ムデイル。宇受売命様ノ一二三四ノ歌ノ御徳ニヨツテ、八百万ノ神様が大二御笑ヒ玉ヒ」(43ウ)

皇祖モ何事ゾト、岩戸ヲヒラキ玉ヒシトリ、六合迄、明クナツタノデアツテ、此一二三四ノ歌ワ、今テモ鎮魂祭用ユルノデ在。畏クモ天皇陛下ノ□□命ヲ千代万代ト御□シ申上ルヨウニ、宮内省デモ此御祭りハ、ツトメル事ニナツテアル。唱歌ト申スワソウユウ者デ在ル。鎮魂祭ト申スト、ツマリカラダカラ魂ノハナレヌヨウニ鎮々祭デ在ルテ、ソレニハ神様ノ御心ヲ慰メ奉ツル為ニ、又神楽ト云者モアツテ、元方末方二方デ柵其他ノ者ヲ採テ、歌ヲ唱ふノデ、御祭ニ神楽ノ在ノワ、唱歌ガ在リテ夫カラ神楽行ワレルノデ在。ドウデモ唱歌ガ元デ在。ソレ故神楽ワ、口ヲキカナイ者故、総テ手真ヲ用ル者ジヤ云事テ在ル。

今申ス通り、唱歌ワ遠ク神代カラ伝ハツタ」(44オ)

モノテ、真ニ大キナ効ノ在ル者テ在ル。又歌ト云者ワ、覚エ易イ者デ在テ、又ニシタ者ヲ覚エルトハヨホドラクナモノテ在ル。我国ノ人ワ天性歌志想ガ在。彼ノ水戸中納言ノ撰バレタ明倫和歌集、アレモ覚エヤスイウタデ、人ノ行ノ為ニナルヨトセラレタノワ、トウデモ歌ワ人ノ頭ニハイリヤスイカラデ在、御考デ在ト思フノミナラス、適當ノ事ト感服スルノテ在ル。

此天理教ニモ、段々深イ教理ヲ伝エテ、行ヒニシテモ、最モ初ハ分リヤスイ、人ノ覚エヤスイ唱歌カラ初メラレタノハ、タトエテ見ルト、遠方ノ山ヲ教エルニ、先ヅ我指ヲ其人ニ教エ置テ、次第ニ其方角エ持テ行クヨウニスルノト同ジ事デ在ル。ドウモ世ノ中ト云者ハ間違ヒ(44ウ)

ヤスイ者テ在。クチデ云斗リデハ間違ガテキル。夫云是迄モ、色々乃違ヒノナイヨウテ在リ。又神様ヲ御心ヲ慰メル為テ在ト聞セテモロテ居舛ス。

続いて「御話」が記されている。これについては、すでに本稿(72)の「その他の文書⑮」で、少し翻刻を試みている。ここで改めて全文を翻刻しておく。

御話

偕テ、此吾々人間は、如何なる処から出来ましたもので有ましよ。太古の事は、姑(シバウ)く措(クキ)、現に此処に居舛、吾々人間は、即ち如何なる処から出来ましよ。然らば其親有テ出来ましたと答へられましよ。然らば、其親其親々と段々元忽元忽と尋ねましたならば、人間の一番御先祖にかゝるて有ましよ。

其一番人間の親は誰で有ましよか。何と言御方でありませう。此世二元がのうて、育つて有者はありますまい。即ち、神様で有ませう。夫を思はず、日々とう」(45オ)

つてをる天の大神様が世界人間親で有ましよ。天の大親様を人間の一番元の親と致しますれば、世界人類は兄弟と言事が分り舛。其世界兄弟と言事お思はず、一寸した事から且に争を起したり、義理付合をか【か】したり、あるいは腹を立ったり、兄弟、親子、親類の中に、且にもつれ合をこしらゑて、日々悪因縁の罪お重ねるばかりで有舛。する事も成事も皆くるしみの種をまく。悪シ敷道を悪き道へと迷ひ込むのは、如何(トウ)にも可愛そうな者であるそて、御神楽歌に

よろすよのせかい一れつみはらせど

むねのわかりたものはない

と御聞せ下さるので有舛。どうも、あわれなものであると、御なげき遊ばされましたのであり舛。(45ウ)

神様の御話と申舛者は、世界の人間に此世の元をしらしたい、此元の道理を知つたなれば、人間が悪しき心起す事はあるまいとの、神様の思召によつて始まりましたので有舛。我々が勝手気儘、世界の話をはきつてきて、祝く処の教とは違ひ舛。又御教祖様が自分勝手ニ御説きなされた教では有ません。此世界、今迄ニ教でない事おば、我々に教ゑ下されたので、元ない人間無世界を御拵らへました処の、真実の元の親神様、此世界外ニ類(クガイ)のない世界の親様、天の親神様で有舛。其親神様が世界を御覧(クソ)遊ばされて、我々人間の為(ス)る事成す事、一向、道の理に叶ふた者なく、皆自分勝手気儘(マ)なる心つかいを致しまして、自分」(46オ)

の心から、深き淵に陥いるよふな有様で、種々様々の苦の本を拵へ、難義苦勞うするお、親神様が見る二見かねて、如何そして早く此人間たる者の心をなをしてやりたい者である。我心からとて難義苦勞をするのは、可愛そうで有。気の毒なもので有と思召しなされて居られまして、天ニは口はなし。地ニは口はなし。神様は直に我々人間に教へ下さるゝと言ふわけニはまいりません。そこで人をして、言はしむると云へる如く、即ち結構なる御心と有難き御霊を持って御居でなさる御教祖様の御身体を元々因縁によつて、神様の御社と定めて、早くから御貰ひ受に成つて有つたので有舛。」(46ウ)

然り乍らいろへの事情の為に、年限か次第のびて来て、漸(ヨウヤ)く神様の御見定めもつき、此世ニ無い、教を始めよふとするにわ、唯、口で説くばかりでは、何の役にもたゝん。此の教を弘むるには、何よりも心が堅固(カク)かたくてなければ、半途(トチウ)で事が過(アヤ)つてならんと思召して、故に第一其雛形手本となるべき者が肝腎(カンジン)あり舛から、其御教祖様にあらん限の艱難(カンナン)苦勞させて、其心のたゆむか、たゆまぬかと言処の験(クシ)しを遊ばされたので在リ舛。なれ共、元よりの因縁にて、結構なる御霊で有舛から、聊かも難義苦勞と思召さす、人を助けたいと言御心は一つも撓(クム)みなさる事か有ません。」(47オ)

何かそこで、今ぞ刻限が来とて、親神様が是をみすまし遊ばされて、何かよろすの道筋、此世の本元の道理を教エたいとて、

天降りて御教祖様に御入込み遊ばされた其日が、天保九年十月二十六日の夜中で有ました。されば前にも申述べました通り、天理教の御話は真実なる天の親神様の御話で有まして、人間が勝手ニ造り出しました御話とは違ひ歟。又、御教祖様は人間に御生なされましても、其実は神様の結構なる御霊を御宿仕込遊ばされた、因縁なる御身体で有ますから、神様御名代で有て、此世の人を御助下さる親様で有ます。然れ共、世界の人はい

(47 ウ)

教祖様の結構なる因縁の御方とは知らずして、我々と同じ人間のよふに思うから、教祖様の言れる事もなされ事も、皆疑ふよふになるので有歟。世間にお教祖様の事お疑ふ人が多いので有り歟。草深い田舎に生れた高の知れた女風情に尊さ天の神様が何とて御心定になる筈はあるか。果して神様此世界の人お教養救う為に教を説き給ふものなれば、もつと立派で学問もあり、知識もあつて、身分の貴き人に御掛りになるのが、あたり前である、言て疑ひゑぐる人あり歟が、是は此世の始まつた時代には、華族もなく平民と言名」(48 オ)

も定まつて居た訳でも有ません。又、学問なども有た訳では有ませず、本元は別に知識の差別もあつたので有ません。

世の中の段々進歩するに従て、社会を組立て、世の始り方の事情ニ依て、斯の如く同じ人間の中にも、種々の名称が出来て、階段のあるよに成たので有歟。そこで神様は世界の人間の本来の親神様で有るから、神様は真実の真事、御心、其真心と言は唯人を助ける心、我身をすてて、人お助る御方ニ神様の御心ニ叶ふたので有歟。」(48 ウ)

人間は神の子

吾人々類は万物の中で、一番知恵を具(ツケ)へたもので有る。森羅万象は神の守護によつて、宇宙間生成化育して居る事は、しん居らねばならん筈で有る。然るに学者や理屈かの中に、神と言者はないと云人か有る。なぜそふ言人が有かと云に、神と云者は無形で有て、現実しないからと云うのが、大一最大ノリグツである。成程神は無形で有に相違ないが、無形で有から、そふゆう者が無いと云筈はない。是は吾人の知恵が眩(くら)んでいるか、又は心が捻(ねじ)れて有。人が神の存在を信すれば、いやでも神を拝み神の教に従かはねばならん。神様の存在を説くに、其証拠を上て、御話し致し歟。サテ如何な者ても、自然に」(49 オ)

暁(あけ)る処の規則か一つある。夫は即ち結果あれば原因あり。末あれば元ナかるべからず、言事である。今人が船とか家とか、若くは機械などをみて、之は偶然(ヒトシゴ)に出来たものであると思う者があまぜふが、決してない。必ず人の手たて成たと知るて有ませふ、船でも家でも機械でも、造り人かなければ出来ないと云うは明な事て有ませふ。煙の上るを見て、其下に火の有事は疑う者は一人もない。故に出来た者には即ち結果か有れば、之を造り出した、即ち原因がなければならんと知るは、別に考へするまでもない。人々直(すぐ)に知る事の出来る真理である。故に之を自明の真理と云。そうして世界の中、原因なくして出来た者、何が有」(49 ウ)

ませふうか。其は一つもない事は自明の真理に因(よ)つて明

に知れる試みに、世界万物をみ、天ニは、日月星の大なるを始め、地ニは海陸山川草木、きん獸、人間の小なる物に至る迄、其数挙げて数ふべき程である。然れども此夥(ヒタタ)しき万物の中、一つにも偶然ニ有者は即ち原因なければ、草一本はをろか、浜の真砂の一粒たに有事は出きません。然らば此天地万物なる結果は、原因は何て有ましょか。草木は吾其種より生するを知る。獸類は、吾其親より出るを知る。水は吾其酸素水素成るお知る。然れ共、其種、其親、其酸素水素を抱合する第一原因は何て有か。斯の」(50 オ)

如く推究すれば、如何トウシテも吾人は其原因なる者は神様に到達しなければなりません。孔子が其末をみて、其元を知ると云た通り有。天地万物と云、末を見て之を創造し給、本なる神様を知ると言事は、苟しくも狂者にあらざる者は、承知せねばならぬ事あろうと思ひ歟。以上は人々自然に暁所の理であると思ひ歟。即ち自明の真理に依て、証拠し得らるゝの、神の存在を信ずには、いかに無学なる人ても、此簡單なる証拠のみで充分ある。」(50 ウ)

とふしても丸う埋まる炭団哉

角い穴にしても円うしか埋まらぬのは、炭団ん其物が丸いからで有る。丸い心で有さいすれば、如何なる角立つた言葉でも、丸うおさめて通るので有る。御教祖様は、我埃がないよふになつたなれば、人の埃が目につかぬと仰せられました御言葉の味ひは、何共言えぬ貴き御言で有ませぬか。

身の終り知らぬ哀れ我秋の蝶

たゞに蝶のみでしよか。人間も殆(ほと)これ有と思ひます。因縁の実理を知らぬ物わ皆これであり歟。人間から人間の因縁を見たら、比較的分り難い。彼の野原につないてある馬が杭(くわ)を中心にして因縁の理もしらすニ」(51 オ)

仕たい放たいに草を食い廻つて居りましたが、いつか、たつなをぐるへまきにして動かれないよふになります。

病氣ニも次のよふ次第で有る

手引・ほこり・いけん・さわり・りいふく・残念(ザンネン)おもわく・そふじ・心へ違い・せきこみ・手いれ。即ち是であり歟。御教祖様の御遺訓中から、是らの御話(コトバ)の出处を求(もと)めると、次の如にみえ居る。

いかなるの病いたみわ更になし
神の咳き込みてびきなるそや
いかなるの病とゆうてないけれと
みにさわりつく神の用むき
よふむきもなにの事やら一寸しれて
神の思わくやまへのこと

「人間は神の子」以下の話は、明治末から大正初期にかけてのものであろう。また、その文章は比較的整っており、お話の参考に何かを筆写したもののように思われる。

なお文中の〈 〉は原文中の振りかなで、【 】は筆者が補足した文字。□は判読不明。